

創世記28：10～17、ヨハネによる福音書14：16～18「両親」

1.

私が宮崎中部教会の皆さまと一緒に礼拝を献げるのは2回目です。前は今から20年前、2004年2月15日、宮崎中部教会の教会創立記念日礼拝でした。その日の午後、都城城南教会との合同修養会をいたしました。その後、2007年9月23日、二つの教会に鹿児島教会が加わって南九州三教会合同修養会、2009年1月18日、二回目の南九州三教会合同修養会において、皆さまと一緒に学びを深めました。

今日、先月9月末まで宮崎中部教会に牧師として仕えられた乾元美牧師が神戸神愛教会に転任なさって二回目の日曜日の朝を迎えました。来年4月から小堀康彦牧師が着任なさる、ということが既に決まっています。しかし、そうであったとしても、今まで神の言葉を取り次いでくださった乾元美牧師がいらっしゃらない、ということは皆さんにとってとてもさびしいことであると思います。教会に行けば、いつものようにいつもの牧師がいる。教会に行けば親しい信仰の友だちがいる、礼拝に出席すれば、礼拝が終わってからいつもおしゃべりする信仰の友だちに会える、ということは皆さんにとってとても心丈夫なことと思います。それだけに、今までここで説教を語ってくださった乾元美牧師がいらっしゃらない、ということはさびしいことであると思います。勿論、礼拝に出席するのは、牧師に会うためではなく、牧師が説教において語る私たちの唯一の真実の救い主神の子主イエス・キリストに出会うためです、と常々教わっていても、身に付けていても、さびしいことだと思います。しかし、皆さんは代務者である岩住啓太牧師のもと、神から希望を戴いて、クリスマスに向かつての日々を歩み始め、来年4月を迎える備えをしておられます。

今朝、耳を傾けています聖書の言葉は新約聖書ヨハネによる福音書14：16～18に記されている言葉です。主イエスが弟子たちとの最後の晩餐において語ってくださった言葉です。主イエスは弟子たちとの最後の晩餐を終えられた翌日、十字架に赴かれます。弟子たちは間もなく主イエスと別れざるを得なくなります。ヨハネによる福音書によると、主イエスは弟子たちとともに三年間寝食をともにしてくださいました。弟子たちは主イエスが語ってくださった

力強い言葉を直ぐ傍で聴くことができました。素晴らしい奇跡を目の当たりにすることができました。この御方こそ救い主神の子である、と信じてついてきました。弟子たちはいつも主イエスがともにいてくださったので安心でした。しかし、主イエスは、間もなく去って行かれる、ということを予告なさいました。それで、主イエスは約束してくださいました。14：16「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにして下さる。」、今まで主イエスが弟子たちの直ぐ傍にいてくださり、弟子たちを護り、助け、慰め、支えてこられました。その主イエスが去って行かれます。そこで、主イエスは御自分の代わりに別の弁護者を与える、と約束してくださいましたのです。

2.

だから、ヨハネによる福音書第14章はこう始まりました。14：1「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。」、弟子たちは主イエスとの別れが近付いており、心を騒がせていました、不安を抱えていました。それで、主イエスは、心を騒がせるな、と語ってくださいました。主イエスはかつてこの地上において、弟子たちとともに歩まれた時、何回でもこの言葉を弟子たちに語られたに違いありません。また、どれだけ多くの人々がこの言葉に慰めを見い出してきたことかと思います。実際、14：27「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」、主イエスはもう一度、心を騒がせるな、と語ってくださいました。弟子たちが心を騒がしていたからです。ヨハネによる福音書第14章は、心を騒がせるな、と主イエスが語ってくださいました言葉で始まり、心を騒がせるな、と主イエスが語ってくださいました言葉で終わっている、と言っても過言ではありません。

しかし、主イエスは、心を騒がせるな、と語られ、頑張れ、と励まされたものではありません。主イエスは弟子たちの心を騒がせる思いを汲んでくださり、14：16「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにして下さる。」、と主イエス御自身が私たちに代わって、私たちに先んじて父なる神に祈りを献げてくださり、別の弁護者を遣わして下さる、と約束してくださいました。心を騒がせるな、と主イエスがお語りになられた言葉と、心を騒がせるな、脅えるな、と主イエスがもう一度お語りになられ

た言葉の間に挟まれている言葉が、別の弁護者を遣わしてくださる、というお約束でした。主イエス御自身が直々に父なる神に願って下さいました。心を騒がせる弟子たちに、私たちに別の弁護者を与えてください、と主イエスが祈りを献げてくださり、別の弁護者をあなたたちに遣わす、と約束して下さいました。主イエスが直接父なる神に願って下さり、弟子たちに、私たちに、別の弁護者を与えてくださる、と約束して下さったのですから、約束を違えられることはありません。弟子たちにとって、私たちにとってこんなに心強いことはありません。

それなら、主イエスが遣わしてくださる、与えてくださると約束して下さった別の弁護者とはいったい何でしょうか。別の弁護者ということは、今までにも弁護者が与えられていた、ということです。それはいったい誰か、というと、今まで弟子たちの傍らにいらっしゃった主イエス御自身です。

弁護者である主イエスが弟子たちを護り、助け、慰め、導いて下さったように、いや、それだけではなく、主イエスが十字架によって弁護して下さったように、別の弁護者もまた主イエスと同じように弟子たちを護り、助け、慰め、導いて下さり、弁護して下さり、私たちが護り、助け、慰め、導いて下さり、弁護して下さるのです。

しかし、主イエスが弟子たちを、私たちが護り、助け、慰め、導いてくださる、ということはいくつかありますが、主イエスが弟子たちを、私たちが十字架によって弁護して下さる、ということはいったいどういうことでしょうか。また、別の弁護者も弟子たちを、私たちが弁護して下さる、ということはいったいどういうことでしょうか。

そもそも、なぜ、弟子たちに、私たちに弁護する者が必要か、というと、私たちが被告人だからです。私たちが被告人、などというのは穏やかではありません。しかし、私たちはもともと神の法廷において審きを受けざるを得ない罪を背負った人間です。私たちは主イエスが求められるような聖さ、義さ、愛の深さに生ききることはできません。ですから、私たちは神と隣人に対する加害者であり、神の法廷において審きを受けざるを得ない被告人です。

罪、というのは誰かを叩いたとか、蹴飛ばしたとか、悪口を言ったとか、勿論、そういうことを含みますけれども、罪、というのは、もともと神と私たちとの間の大きな隔たりです、神との関係の破れ、神が私たちから、遠く隔たっておられることです。この隔たりを、教会では、

罪、と言います。この隔たりに主イエスが十字架によって、梯子を架けてくださいました、橋を架けてくださいました。

裁判所に出ていかなければならない被告人に弁護士が与えられ、弁護士の力によって罪が軽くなり、無罪が裁判長によって言い渡されるように、私たちは神の法廷、神の前での裁判において、明らかに有罪が確定しているのにもかかわらず、弁護士である主イエスが十字架によって私たちが受けるべき筈であった罪の審きを身代わりに引き受けてくださり、裁判長である父なる神によって無罪が言い渡されたのです。

このように、アダムとエバの墮落によって閉じられてしまった父なる神への道、いや、私たち自身の罪によって閉じられてしまった神の国、天国への道を主イエスが御自分の十字架によって開いてくださったのです。閉ざされた天国への道を主イエスが私たちのために御自分の十字架の死と復活によって開けてくださったのです。

だから、主イエスは、14：6「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」、と約束してくださいました。神に至る道、救いに至る道は唯一つ、主イエスの十字架の死と復活が私たちの罪の審きの身代わりであった、と信じる信仰です。

さらに、かつて主イエスが弟子たちの傍らにいてくださり、弟子たちを護り、助け、慰め、支え、十字架によって弁護してくださったように、別の弁護士もまた主イエスと同じように弟子たちを護り、助け、慰め、導いてくださり、弁護してくださり、私たちに護り、助け、慰め、導いてくださり、弁護してくださるのです。

3.

別の弁護士、と翻訳されている言葉を、最も新しい日本語訳聖書である『聖書協会共同訳聖書』は、もうひとりの弁護士、と翻訳しています。『口語訳聖書』や『文語訳聖書』は、助け主、と翻訳しており、明治訳、と呼ばれている『文語訳聖書』は、慰むる者、と翻訳していました。父なる神が弟子たちに与えてくださる別の弁護士、もうひとりの弁護士は弟子たちを助け、慰める者、私たちに助け、慰めてくださる者。弁護士、助け主、慰むる者、と翻訳されている言葉は、もともと、呼べば傍らに来る者、という意味の言葉です。なぜ、呼ぶのでしょうか。不

安だから、苦しいから、悲しいから、悩んでいるから、痛みを抱えているから、さびしいから、自分一人だけで耐えることができないからです。だから、傍にいてほしい、助けてほしい、慰めてほしい、と呼び掛けます。

間もなく主イエスは弟子たちのところから去って行かれます。弟子たちだけが取り残されま
す。弟子たちは今まで主イエスが自分たちのすぐ傍にいてくださったから安心でした。ところが、主イエスが去って行かれます。弟子たちのこの不安は私たちにもよく分かります。私たちもさまざまな出来事に出遭って、不安になることがあります、一人で耐えることができなくなってしまふことがあります。その時、牧師、家族、友人、知人がいてくれると安心です。呼べば来てくれるからです。主イエスはここで弟子たちに、御自分の代わりに呼べば来てくださる
助け主、慰める者、もうひとりの弁護者を遣わしてくださる、と約束してくださいました。

呼べば来てくださる助け主、慰める者、もうひとりの弁護者とはいったい何でしょうか。14 : 17 「この方は、真理の霊である。」、真理の霊。 14 : 6 「イエスは言われた。『わたしは道であり、真理であり、命である。』」、真理の霊、というのは主イエスの霊、神の霊です。言い換えると、聖霊です。別の弁護者とは主イエスの霊、聖霊です。主イエスは御自分の代わりに、もうひとりの弁護者である聖霊を遣わしてくださることを約束してくださったのです。だから、心を騒がせる必要がない。

4 - a .

今まで主イエスが弟子たちの直ぐ傍にいてくださり、弟子たちを護り、助け、慰め、導いて
くださり、十字架によって弁護してくださったように、これからはもうひとりの弁護者である
聖霊が弟子たちを護り、助け、慰め、導いてくださり、弟子たちのために執り成して下さる
から、心を騒がせる必要がなくなるのです。主イエスが弁護者として十字架に赴いてくださり、
神と私たちとの間に横たわっている罪という断絶に梯子、橋を架けてくださり、神とともに生
きることができるようにしてくださり、私たちの不安を取り除いてくださいました。

さらに、もうひとりの弁護者である聖霊を弟子たちに降り注いでくださり、主イエスがこの
地上において弟子たちの直ぐ傍にいてくださり、弟子たちを護り、助け、慰め、導いてくださ
ったように、もうひとりの弁護者である聖霊が私たちの直ぐ傍にいてくださり、私たちたちを

護り、助け、慰め、導いてくださり、父なる神に祈りを運んでくださるのです。だから、もう心を騒がせる必要はない、平和、平安を与える、と主イエスは約束してくださったのです。

4 - b.

14 : 27 「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」と語っておられるように、弟子たちは心を騒がせ、脅え、歩き始める勇気を失っていました。 私たちもまたさまざまな出来事に遭遇し、心を騒がせ、脅え、立ち上がって、それぞれの人生に、歩むべき道に出掛けて行くことができなくなってしまうことがあります。 主イエスは、私たちが教会での暫くの安息と休息を喜び楽しむだけでなく、歩き始めることを求めておられます。 私たちが歩き始める時に、脅えがあることを主イエスは御存知です。だからこそ、主イエスは、心を騒がせるな、脅えるな、と励ましてくださり、平安を与えてくださることを約束してくださいました。 しかし、ただ心を騒がせるな、脅えるな、頑張れ、と仰ったのではありません。

主イエスが語ってくださった言葉は、14 : 27 「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」という言葉でした。主イエスが平和を残してくださるのです。『新共同訳聖書』は、平和、と翻訳していますが、『口語訳聖書』は、平安、と翻訳していました。主イエスが平和、平安を与えてくださるのです。平和、神との和らぎが与えられ、初めて神との安らぎが与えられるのです。主イエスが十字架によって神との和らぎ、平和を与えてくださり、神がともにいてくださる安らぎ、平安を与えてくださるのです。 だから、心を騒がせる必要もないし、脅える必要もありません。もう一度立ち上がって歩き始めることができます。主イエスは、心を騒がせるな、脅えるな、と語ってくださっただけでなく、主イエスは御自分の代わりに、呼べば傍らに来てくださる者、護り、助け、慰め、導いてくださるもうひとりの弁護者である聖霊を遣わしてくださることを約束してくださいました。

4 - c.

しかも、ここで、忘れることができないのは、私たちだけが、弟子たちだけが心を騒がせ、

不安になるのではない、ということです。いったい誰が心を騒がせられるのでしょうか。

主イエス御自身です。12：27 「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。」しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。」、主イエス御自身が言葉を失われるほど、心を騒がせておられました。13：21「イエスはこう話し終わると、心を騒がせ、断言された」、主イエス御自身が心を騒がしておられました。主イエスも心を騒がしておられました。だから、主イエスは、心を騒がせるような、右往左往するような弟子たちはだらしがない、と退けられるものではありません。主イエス御自身、心を騒がせておられました。弟子たちや私たちと同じ経験をなさいました。だからこそ、不安になる弟子たちの思いを汲んでくださることができるのです。心が騒ぎ、不安になる私たちの思いを主イエスは誰よりもよく御存知です。

そこでこそ、主イエスは断言して下さり、約束してくださいました。14：27 「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」主イエスの平安はこの世が与えることのできるような平安なのではなく、この世が与え得るような方法で与えられる平安でもない、と語られました。それでは、いったい主イエスが与えてくださる平安とはどのような平安でしょうか。

14：28 『わたしは去って行くが、また、あなたがたのところへ戻って来る』と言ったのをあなたがたは聞いた。わたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くのを喜んでくれるはずだ。父はわたしよりも偉大な方だからである。」、主イエスが弟子たちのところを去って行かれ十字架に磔られ、殺され、御復活させられ、父なる神のところへ去って行かれることによって与えてくださる平和、平安です。主イエスが十字架に磔られ、御復活させられることによって与えられる平和、平安です。主イエスが弟子たちや私たちに与えてくださる平和、平安は主イエスの十字架の死と復活による平和、平安です。ですから、主イエスが与えてくださる平和、平安はこの世が与えるような平和、平安ではなく、この世が与え得るような方法で与えるような平和、平安でもありません。

主イエスは御自分の十字架の死と復活によって神と私たちの間に平和を築いて下さり、真実の平安を与えてくださいました、神とともに生きることができるようにしてくださいました。

主イエスは御復活なさった後、四十日間にわたって弟子たちとともにいてくださいました。弟子たちにとってどれほど心強いものであったか、と思います。しかし、主イエスは御復活なさった後、永久にこの地上にとどまられたのではありませんでした。天に帰られました。しかし、それで、弟子たちから平安が失われたか、というと、そうではありませんでした。

主イエスが、14：18「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに帰って来る。」、と約束してくださったように、主イエスは戻ってきてくださいました。主イエスはどのようにして戻って来てくださったか、というと、14：16「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにして下さる。」、と約束してくださったように、もうひとりの弁護者である聖霊をお遣わしくださることによって、弟子たちのところに帰ってきてくださいました。

だから、主イエスは、14：28「『わたしは去って行くが、また、あなたがたのところへ戻って来る』と言ったのをあなたがたは聞いた。わたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くのを喜んでくれるはずだ。」、と語られ、16：7「実を言うと、わたしが去っていくのは、あなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところへ送る。」、主イエスが天に帰られることによって、初めてもうひとりの弁護者である聖霊が与えられます。かつて主イエスが弟子たちの直ぐ傍にいてくださり、弟子たちを護り、助け、慰め、支えてくださったように、いや、それにもまさって主イエスが遣わして下さるもうひとりの弁護者である聖霊が私たちを護り、助け、慰め、支えてくださるのです。

しかも、14：17「この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。」、護り、助け、慰め、支えてくださる聖霊が私たちの傍らにいてくださるだけではなく、私たちの内に、心と体の中に住んでくださるのです。さらに、14：16「永遠にあなたがたと一緒にいるようにして下さる。」、14：23「わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところへ行き、一緒に住む。」、永遠にです。永遠に父なる神と主イエスが私たちと一緒にいてくださる。私たちの心と体の中に一緒に住んでくださり、護り、助け、慰め、支えてくださるのです。私たち

が生きている時にも死ぬ時にも聖霊、神の霊に包まれているのです。神の霊、聖霊が私たちに住んでいてくださるのです。神の審きの座の前に立たされる時にも、聖霊と一緒にいてくださる。まさにそこで私たちが弁護してくださいます。覆い隠すことができない私たちの罪が暴かれる時にも、弁護してくださるのです。

5.

最後に、主イエスが遣わしてくださる聖霊がどのようにして平安を与えてくださるのでしょうか。

14 : 26 ~ 27 「しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」、主イエスが遣わして下さる弁護者、即ち、聖霊が、主イエスが語ってくださった言葉を思い起こさせてくださり、教えてくださり、平安を与えてくださるのです。聖霊がこれまで主イエスが弟子たちに語ってくださった言葉を思い起こさせてくださり、教えてくださり、平安を与えてくださるのです。主イエスが語ってくださった言葉が聖霊によって弟子たちに運ばれ、私たちに運ばれる時、平安が与えられるのです。礼拝によって、説教を通して、聖霊がはたらいてくださり、私たちが護り、助け、慰め、支え、励まし、立ち上がらせてくださるのです。

14 : 1 「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。」、と語り初めてくださった主イエスが、もう一度、14 : 27 「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」、と語ってくださり、礼拝によって、説教を通して、聖霊がはたらいてくださり、心を騒がせる私たちに真実の平安を与えてくださるのです。

主イエスは約束してくださいました。14 : 18 「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。」、私たちは孤児ではありません。孤児は親がいない子どもたちです。私たちには両親が与えられました。父なる神、母なる教会です。母なる教会に抱かれて、神を父よ、と呼び掛けながら生きることができる神の子どもなのです。